

連載記事「クルアーンの秘密」に見る イスラーム近代主義：予備的考察

國谷 徹

愛知大学非常勤講師

1. はじめに

本稿は、雑誌『カラム』の連載記事「クルアーンの秘密：知識と哲学の観点から (Rahsia al-Qur'an: dari segi ilmu dan falsafah)」を題材として、20世紀前半の東南アジアにおけるイスラーム近代主義の一側面を考察しようとする試論である。当該記事は『カラム』第10号(1951年5月)に第1回が掲載され、以後、第41号(1953年12月)まで、全27回にわたって(途中数度の休載をはさみながら)連載された。著者はシンガポールで活動したウラマー、アブドゥッラー・バスメー (Abdullah Basmeh; 1913-1996年)である。筆者は昨年以来この記事のローマ字への翻字と内容の読解を進めているが、現在までに作業を終了したのは『カラム』第26号(1952年9月)掲載の連載第14回までである。従って本論は途中経過における予備的考察であり、記事の資料的特徴を明らかにし、東南アジアのイスラーム研究の文脈における利用可能性を探ろうとするものである。

1950～69年の20年間にわたりシンガポールで発行されたマレー語誌『カラム』は、当時主流になりつつあったローマ字ではなくジャウィ文字を使用し、中東を中心に他のイスラーム諸地域への強い関心を持ち、そうした他地域の歴史や現状を紹介する記事が多く掲載された。当然、イスラームに関する記事も多く見られるが、例えば神学や法学、法源学などといった古典的イスラーム諸学そのものを扱った記事は多くない。『カラム』の言説そのものは概ね近代的ジャーナリズムのそれであり、近代社会に生きる一般ムスリムを読者として想定しているように見える。

そうした中であって、この連載記事「クルアーンの秘密」は、クルアーン解釈学(タフシール Tafsir al-Qur'an)の専門家として知られるウラマーによるクルアーン解説であり、かつ長期間にわたって連載されたという点で異色である。『カラム』の言説空間の

中で、ウラマーによるクルアーン解釈学はどのように解説され、提示されるのか。また、このような記事を著した著者の意図はどこにあったのか。この2つの問題について考察を試みたい。

2. 記事の基本的特徴

連載記事の著者アブドゥッラー・バスメーは、20世紀半ばにシンガポールで活動したウラマーで、クルアーン解釈学で知られる他、一般向けのイスラームに関する解説・啓蒙書の類も幾つか執筆している。『カラム』創始者のアフマド・ルトフィとも関係があったようで、詳細は不明だがシンガポールにおけるムスリム同胞団(al-Ikhwan al-Muslimin)の創設(1956年)に際して中心的役割を果たしたと言われる[山本2003:69]。その詳しい経歴や思想的背景等に関してはこれまでほとんど研究が見られないが¹、本論でその一端を明らかにするように、エジプトの“本家”ムスリム同胞団から強い影響を受けた改革主義的思想の持ち主であると思われ、彼の思想は東南アジアにおけるイスラーム改革主義思想の系譜を考えるうえで重要であろう。

バスメーは『カラム』誌上において、この連載記事の他にも、「イスラームにおける離婚問題」などといった論説、エジプトのムスリム同胞団など同時代の中東事情の紹介、イスラーム史上の著名な人物の評伝など、多彩な記事を執筆している。この連載記事においても、著者の基本的なスタンスは、クルアーンの内容を一般のムスリムに分かりやすく解説し、現代社会で生活するうえでの道徳・価値観の基準とするように勧める、という啓蒙的なものであり、たとえ話なども交えた平易な筆致で書かれている。記事は毎回2～5ページ程度の長さで、一定のテーマに基づく

1 マラヤ大学図書館のウェブサイトで検索すると、バスメー自身の著作の他に、バスメーのクルアーン解釈学について論じた学位論文が数点見つかる。

内容が数回に分けて掲載され、また次のテーマに移る、という体裁が基本である。

ただし、著者は自らが直接クルアーンの内容を解説するのではなく、(少なくとも連載前半においては)20世紀初頭に活躍したエジプトのウラマー、タンターウィー・ジャウハリー(Tantawi Jawhari: 1862-1940年)によるクルアーン解釈を紹介する、という体裁をとる。タンターウィーは20世紀初頭のエジプトにおける代表的なクルアーン解釈学者であり、ラシード・リダー(Muhammad Rashid Rida)らとともに雑誌『マナール(Al-Manar)』を中心にイスラーム復興・改革運動を推進した人物である。特に、いわゆる近代主義的イスラーム改革の推進者として知られ、“科学的”クルアーン解釈という方法を提唱し、西洋近代科学の知識・技術などは全てクルアーンの中に既に明示されている、との理論によって、そうした近代科学の導入を正当化した、とされる。1930年代には、ムスリム同胞団の創設者ハサン・バンナー(Hasan al-Banna)とともに雑誌『ムスリム同胞団』の編集に携わったことがあり、いわゆるサラフィー主義²を主張するムスリム同胞団の思想形成にも一定の影響を与えている[大塚他編2002:626]。

タンターウィーの著作は、東南アジアでも改革主義的なムスリム、いわゆるカウム・ムダ(kaum muda)³の間で広く読まれていたようである。1920年代の半ば頃には、カイロに留学したインドネシア人ムスリムの多くが彼の教えを受けており、またタンターウィーもインドネシアからの留学生の受け入れに積極的であった。他方で、彼の近代主義的イスラーム改革の主張は、当時のムスリム知識人の中で論議を呼ぶものでもあった。当時のオランダ領東インド植民地政府は、彼の著作がムスリムの改革派と守旧派との論争を過激化させることを恐れ、その出版・流通を禁止していた[Laffan 2003:136, 217-218]。

2 サラフィー主義とは、イスラーム世界の“墮落した”現状を本来のイスラームからの逸脱ととらえ、預言者ムハンマドの時代の“真正な”イスラームへの回帰を主張するものであり、20世紀のイスラーム復興・改革運動の主流となった思想である。同時に、古典的イスラーム諸学の硬直化を批判し、イスラーム法(シャリーア)の積極的な再解釈を推進することによって、イスラームと近代文明との調和を目指すものでもあった[大塚他編2002:418]。

3 東南アジアにおいては20世紀初頭以降、先述の『マナール』など中東で出版された雑誌等の流入、現地における類いの雑誌類の出版などを契機としてイスラーム改革主義が広まった。彼ら改革主義者たちは一般に“カウム・ムダ(若いグループ)”と呼ばれ(または自称し)、伝統的イスラーム諸学の堅持を主張する守旧派“カウム・トゥア(古いグループ)”との間で激しい論争を繰り広げた。[Noer 1973]、[Abdullah 1971]などを参照。

連載第1回[Qalam 10(1951.5):28-29]⁴の冒頭で、著者バスメーはタンターウィーの代表作である26巻におよぶクルアーン注釈書『クルアーン解釈の本質(Al-Jawahir fi tafsir al-Qur'an al-qarim)』を取り上げ、そのクルアーン解釈が「現代の進歩的知識や哲学に適合した」ものであるだけでなく、「……古代エジプト、ギリシャ、ローマ、ペルシア、ユダヤ、インド、中国、そして現在の西洋文明など古今東西の知識・学問をも含んだ、イスラームの百科事典とも言えるものである。それら諸民族の諸学問は詳しく研究され、イスラームの教えに適合するものとして提示される……」と述べている。即ち、この連載記事は、タンターウィーの近代主義的クルアーン解釈を下敷きにして、上述したようなイスラーム復興・改革運動の思想——イスラームの自己革新、イスラームと近代文明の調和——を『カラム』読者に伝えようとするものである。

3. 記事の内容分析

本節では、上述した問題意識に基づき、特に近代主義的思想の表出のされ方に注意を払いながら、実際の記事の具体的内容を簡単にまとめる。筆者がこれまでに読解を終えた第14回までの記事は、扱っているテーマによって大きく3つに分類できる。

3-1 タンターウィーの人物像

まず第1～3回は、タンターウィーの人物像・経歴・業績を紹介する内容である。エジプト人、フランス人、インドネシア人という、それぞれ立場の異なる3者によるタンターウィー評を順に紹介し、彼が世界各地で高い評価を受けた知識人であることを強調しようとしている。

まず第1回ではエジプトの弁護士・ジャーナリスト、ルトフィ・ジェマーア(Muhammad Baki Lutfi Jema'ah)という人物が新聞『アル・イフラーム(al-Ihram)』に掲載したタンターウィーの人物評(年月日は不明)が取り上げられる。ルトフィは、タンターウィーが1901年ごろにダール・アル＝ウルーム(Dar al-'Ulum)⁵で行った教育について、以下のように述懐

4 以下、『カラム』からの参照・引用については、このように記事ごとに号数、発行年月、ページ数を示す。

5 1871年にカイロに設立された教員養成学校で、イスラーム教育だけでなく数学や地理などの近代的教育も行った[大塚他編2002:619]。

する。「……はじめ、彼の解説はガザリーの著作に基づくものであった。また、『動物の生命(hayat al-hewan)』という書を参照してクルアーンの章句を解釈し、知識の素晴らしさについて、アッラーの被造物たるあらゆる動物について、天と地の創造の奇跡について語った。さらに、シャイフ・タンターウィーはダーウィンの理論についても論じた。彼はその理論について研究するのを拒絶したりはせず、そこには厳密な研究に基づく真実が含まれている、との見解を持っていた。その自由な思考の実践は、学生たちの精神に良い印象を残した……」。ここに既に、タンターウィーの西洋近代科学に対する考え方が明瞭に見て取れると言えよう。他にも、イギリスのエイヴベリー卿⁶の『人生の喜び』等の著書に触れたのがきっかけで西洋の哲学思想に関心を持ち、40歳を超えてから英語を習得したことなど、西洋の学問との関わりの深さが述べられる。

第2回[Qalam11(1951.6): 10-11]では、1908年にフランス・アジア協会(Societe asiatique)の機関誌『アジア雑誌(Journal asiatique)』に掲載されたタンターウィーの著作の紹介記事が扱われる。ここでも、タンターウィーの著作に対する評価として、「……新しい精神を持ったムスリムのために書かれたものである……その著作は2つの主張に基づいている。第一に、イスラームは真の宗教であり、人類の発展史と理性的思考に調和し、同じ方向性を持つものであること。第二に、イスラームはその信者たちに対して、あらゆる知識・学問を学び、この世界を支配する様々な法則を追究するよう促してきたこと、である……」といったように、近代西洋の価値観との親和性という側面が強調されている。

第3回[Qalam12(1951.7): 41-42]では、1940年にインドネシアの雑誌『パンジ・イスラム(Panji Islam)』に掲載されたタンターウィーの追悼記事を紹介している。ここでは、前2者と異なり、彼の近代主義的思想についてはほとんど言及されていない。彼が東南アジアのムスリムからも“イスラーム哲学の父”として高く評価され、尊敬されていたことを述べるのだが、「……シャイフ・タンターウィー・ジャウハリーは全イスラーム世界で有名であり、我々がインドネシアでも例外ではない。彼の著作と思想はインドネシア民族によって称賛されている。彼もまた我が民族に

対して、“東洋ではインドネシアが、文化、発展の度合いにおいて最も優れている”と賛辞を送っている。……彼はエジプトのインドネシア人留学生の集会にしばしば出席し、演説を行い、重要な支援を行ってくれた……」といったように、インドネシア民族との結びつきが強調されている。さらにタンターウィー自身について、「……あるとき彼は、『私は武力によってではなく、ペンの力によってヨーロッパと闘うのだ』と語った……」というように、西洋文明との調和を目指したというよりも、西洋に比肩し得る、対抗し得るイスラーム知識人として位置づけ、評価している。インドネシア民族主義の文脈から書かれたこの記事において、タンターウィーの最大の特徴である彼の近代主義的思想にほとんど関心が向けられていない点は留意しておく必要がある。

3-2 クルアーン解釈の実例

第4回から第7回までは、「1928年8月にイギリス・オックスフォードで行われた東洋学関係の会議」(詳細は不明)において報告されたタンターウィーの論説「クルアーンとその言語・科学・社会・道徳への影響」の内容を詳細に紹介し、彼のクルアーン解釈の具体例を示している。この部分では、個別のトピックごとにそれに対応するクルアーンの具体的な章句を(アラビア語で)数多く掲げ、その後にその章句の解釈と解説がなされる、という叙述形式がとられる。

第4回[Qalam13(1951.8): 29-30]では導入として、クルアーン自体の基本的な特徴を解説する。まず、クルアーンは「……アッラーから下された真の啓典であり、それ自体が奇跡であり永遠である。その真正性については、時代を問わず常に絶対であり、これに疑いを持つことは許されない。それは、神を畏れ、アッラーの命令に従う人々のための導きの書である……」と、その基本的性質を規定する。この点はごく正統的・一般的な解釈と言える。

次いでクルアーンの内容を概観する。最初に「クルアーンの内容には、現世と来世において人々が必要とする全てのことが含まれている」と述べられるが、ここにはバスマーによる注釈が付けられている。「……これは、クルアーンの中に全てのことが、例えば皮を剥いてすぐに食べられるようにしたバナナのように、あからさまに目の前に提示されているという意味ではない。実際には、クルアーンの全ての章句の中から、イスラームのウマットがこれを調べ、探求

6 エイヴベリー男爵ジョン・ルボック(John Lubbock, Lord Avebury; 1834-1913)。ダーウィンの影響を受け、生物学者・考古学者として活動した。

し、その秘密を発見することが望まれている。かつて我々の祖先はそうにして輝かしい文明を築いたのであり、今日では西洋人たちがそれを継承し、改良している……」。ここでも、時代状況に合わせたクルアーンの再解釈を主張したイスラーム改革主義の主張と、イスラームを継承したのが西洋近代文明であるとする近代主義イスラームの主張とが明確に表れている。

次いで、クルアーンの内容が12のジャンルに分類できると述べる。それらは以下の通りである：①教義（いわゆる六信）に関すること。「牝牛」章第285節など、多数の章句が該当する。②義務（いわゆる五行）に関すること⁷。「牝牛」章第2、110、183節や「イムラーン一家」章第97節など。③命令と禁止に関すること。善行を命じ悪行を禁じる内容である。④信仰者と不信仰者のそれぞれの運命に関すること。⑤クルアーンの内容を曲解する人々に関すること。⑥過去の預言者たちの歴史。⑦社会に関する法。例えばザカート（喜捨）の徴収と分配に関すること。⑧政治に関する法。為政者への服従や、契約の履行に関して。⑨不浄に関する法、いわゆる同害報復刑について。⑩民法や商法。利息の禁止など。⑪戦争に関する法。捕虜の扱い、戦利品の分配など。⑫助言や導き。

以上の基本的な解説を踏まえて、記事は本題であるクルアーンの様々な方面への影響についての議論に入る。第4回の後半部ではまず、クルアーンの言語への影響について述べている。預言者ムハンマドの出身部族であるクライシュ族がメッカにおける有力氏族であり、彼らの言語が広く流通していたことを説明した後、「……クルアーンの言語は、アラブの諸部族が各々のやり方で読み、理解することができるような文法で書かれていた。……この文法によってアラブ民族の言語は1つに統一され、それによって彼らは1つのウマツ（共同体）となることができた……」と述べ、クルアーンがアラブ諸部族の言語の統一、ひいてはアラブ民族のウマツの発展に大きな役割を果たしたことを示す。

第5回[Qalam14(1951.9):12-14]では、クルアーンの社会への影響を論じる。ここでも、記事はアラブ民族の具体的な事例から説き起こしている。「……クルアーンが下された当時、アラブ民族は分裂し、愚かに

も絶えず互いに争い合っていた。……クルアーンの導きの光を受け取る事によって、彼らは徐々に一致団結し、互いに助け合うようになった。……クルアーンの社会への影響は、彼ら（アラブ民族）が1つのウマツにまとまり、高い道徳を身につけ、善行を行い、隣人を尊敬し、契約を守り、あらゆる種類の悪行を慎むようになったことである。……」。そして、このような共同体の改善・発展はクルアーンの導きによってのみなされ得る、と説く。「……クルアーンこそは人類の病を癒すことのできる医師である。クルアーンはアラブ民族の性格・道徳を作り変え、その結果、イスラームの初期においては、クルアーンを導きとして、人類の歴史上かつてなかったような高度な社会組織がつくられた……」。

その後、記事はイスラームにおける預言者についての解説に移る。過去に多くの預言者たちがアッラーの使徒として様々なウマツに遣われ、それぞれの社会の発展に尽力したことが語られた後、最後の預言者としてのムハンマドの優越性が説かれる。「……過去の預言者たちは、例えるなら、部屋の1つ1つにそれぞれ明かりがもたらされ、各々の部屋のみを照らし出したようなものである。しかし、アラビア半島にムハンマドという太陽が出現した以上、もはや1つ1つの部屋を照らす明かりは必要とされない……」。そして、ムハンマドが成し遂げたアラブ民族のウマツの統一、社会の発展の成果が称賛される。

第4～5回において、記事が具体的な話題に入っていくと同時に、アラブ民族の過去の歴史についての言及が多く見られる。記事がエジプト人であるタンターウィーの著作をもとにしていることを考えれば、これは当然とも言えるが、東南アジアのムスリム読者の立場からすれば、やや唐突な印象も受けるのではない。にもかかわらず、バスメーが特に注釈やアレンジを加えることもなく叙述を進めている点は興味深い。

次いで第6回[Qalam15(1951.10):25-27]では、クルアーンの道徳面への影響を述べる。この回では、前2回に見られたようなアラブ民族についての頻繁な言及は見られず、より普遍的な道徳について、これまで以上にクルアーンの章句を豊富に引用しながら論じられる。まずはじめに、父母や年長者への敬意が取り上げられる。例えば「夜の旅」章第23-24節、「……それからまた自分の両親には、その一方、または両方とも

7 六信とは神、天使、使徒（預言者）、啓典、来世、定命の6つで、これらの存在を信じるのがムスリムの基本的な信仰箇条となる。一方、五行とは信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼の5つで、これらを実践することがムスリムの義務である。

お前のところで老齢に達した場合、できるだけ優しくいたわってやるようにと。……言葉荒らげて叱ったりしてはならぬ。丁寧な言葉遣いで話しかけよ。……「主よ、なにとぞ、この2人にあわれみを垂れ給え、幼い頃、2人が私を大事に育ててくれましたように」と祈ってやるよう。」「[井筒1958b:96-97]などの章句を紹介し⁸、父母や年長者、指導者などへの服従と尊敬の重要性が述べられる。そして、「……イスラームは全ての人類に対して、年長者や指導者への服従を求めている。これは、社会が混乱するのを防ぎ、秩序を維持するためである」と述べ、クルアーンに示された道徳が正しい社会秩序の基盤であると主張する。

続いて著者は、クルアーンにおける道徳の基礎が“敬虔、畏れ(taqwa)”という概念であると述べる。「……(ムハンマド)はこのことを説明し、次のように仰せになった:あらゆる人々のうち、最も優れているのは神を畏れる(taqwa)人である、と」⁹。そして、その具体的な内容は、善行を行うこと、悪行を行わないこと、アッラーを信じることの3つであるとする。

著者はさらに、「食卓」章第8節「……(自分の敵とする)人々を憎むあまり正義の道を踏みはずしてはならぬ。常に公正であれ……アッラーを懼れまつれ……」[井筒1958a:146]を参照し、クルアーンの道徳が公正・友好・平和主義を志向するものである、と述べる。「……この精神こそ、イスラームが広く拡大していく最大の要因となったものである。このために、タタールやモンゴル人などのように、イスラームを根こそぎ滅亡させようと試みた敵たちも、最後には(イスラームを受け入れ)その強力な支援者・守護者となった……」。

第7回[Qalam16(1951.11):26-28]はクルアーンの学問・科学への影響を取り上げる。ここでは冒頭から、「……クルアーンこそはイスラーム文明を作り出したものであり、そしてイスラームの文明こそは、既に埋もれていた古代の諸民族の学問を掘り起こし、これを発展させ、世界に学問を広めるのに貢献したのである。これが、今日のヨーロッパの“新しい学問”の基礎となったのである……」と述べられ、近代科学の起

源はイスラームにあるとするタンターウィーの思想が端的に表現されている。

そして、クルアーンこそは人間の理性的思考を解放し、学問の発展に向かわせたものである、と主張される。ここでも根拠として多数の章句が引用・解説されるが、それらは例えば「イムラーン一家」章第190節「まこと、天と地の創造、夜と昼との交替、心ある者にとっては、これすなわち神兆ではないか」[井筒1958a:105]のように、アッラーによる万物の創造についての認識を促す内容が多い¹⁰。すなわち、世界のあらゆる物事のなかに創造という神の奇跡を認識し、理性によってその秘密を探求しようとするのが学問の発展につながった、というのがタンターウィーの論理である。そのうえで、「……上に挙げた章句は全て、クルアーンが人間の理性的思考を解放してきたことの証である。ヨーロッパ人たちは、クルアーンに既に明示されていることに従って(つまり、ムスリムの知識を取り入れることによって)初めて、今日見られるような進歩に達することができたのである……」と、イスラームの近代西洋科学への影響を再度強調する。

最後に著者は「……今日でもクルアーンの内容の研究は進められ、新しい秘密が明らかにされている……」と述べる。例えば「預言者」章第30節「信仰なき者どもにはわからないのか、天と地はもと1枚つづきの縫い合わせであったのを、我らがほどいて2つに分けた……」[井筒1958b:155]という章句について、「……現代の学者はこれを、地球と太陽の関係を表現したものと認識している」といったように、幾つかの章句を例に引き、クルアーンの内容が近代科学の成果を予見しているとする解釈を提示する。

第8回[Qalam17(1951.12):23-25]と第9回[Qalam18(1952.1):16-17]もクルアーンの解説が続くが、これまでとやや論調が変わり、「フード」章第113節「悪事にふける者どもを頼りにしてはならぬ。そのようなことをすると(地獄の)劫火にみまわれるぞ。そうなれば、アッラーのほかには保護者としてないお前たちのこと、もう誰にも助けては貰えまいぞ。」「[井筒1958b:25]を題材として、外部、非イスラーム世界からの悪しき影響に対する警戒が主張される。バスメーによると、タンターウィーはこの章句の冒頭の一文を、“非ムスリムの影響を受け、彼らの行動や性質を模倣し

8 以下、クルアーンの章題および章句の翻訳は全て岩波文庫版[井筒1958a, b, c]によった。ただし、バスメーが用いているものとは版が異なるため、節の番号が微妙に食い違う。例えばこの章句は岩波文庫版では第24～25節である。しかしあまりに煩瑣であるので、以下ではこの差異には逐一言及しない。

9 ここでは、クルアーン自体だけでなく預言者ムハンマドの言行録(ハディース)も参照していることがわかる。この箇所ではバスメーは典拠を明示していないが、連載の後半になると幾つかの主要なハディース集からの引用が増える。

10 この引用文で「心ある者」とある部分は、バスメーのマレー語訳では「理性ある人々(orang-orang yang berakal)」となっている。「理性(akal)」の語は、東南アジアの近代主義的イスラーム改革運動において重要なキーワードであった[Noer 1973]。

てはならない”と解釈し、西洋諸国の支配下に置かれた当時のエジプトの状況を批判したという。さらにタンターウィーは、同じ章句の後半部分から、ムスリムにとっての救いはアッラー以外にはあり得ないとし、外国からの影響に惑わされないように説いた。バスメー自身も、「……イスラーム諸国の王族や有力者のなかで、外国人からもたらされたリングット貨幣や富、地位や階級などに騙されている人々が少なくない。……外国人はこのようなまやかしによって、ムスリムを奴隷の地位に貶めている……」と、イスラームが西洋に対して従属的な地位に置かれていることを慨嘆している。

次いで、そのようなイスラームの“墮落”の実例として、中世のイベリア半島におけるイスラーム勢力のキリスト教勢力に対する敗北の歴史が語られる。最後にバスメーは、「……（このようなことは）多くのイスラーム諸国で繰り返し起きており、今日のマラヤも例外ではない。……ムラユ人たちは宗教、民族、祖国を愛することで、災難を防ぐことが求められる……」と、当時のマラヤの状況に読者の注意を促している。マラヤあるいは東南アジアの具体的な状況に言及することが極めて少ないのがこの連載記事の1つの特徴であるが、ここはその数少ない例外である。

以上から、このクルアーン解説におけるタンターウィー（およびバスメー）の主張は、①クルアーンは様々な面において人類の発展の原動力であったこと、②近代西洋の発展もまた、もとはクルアーンとアラブ民族が築いたイスラーム文明に起源を持つこと、③クルアーンには近代科学の内容も包含されており、その教えは現在でも発展の道標として有効であること、の3点にまとめることができよう。そしてそれ故に、イスラーム諸国の“発展(kemajuan)”は、それが実質的には西洋化・近代化を指すとしても、西洋の模倣ではなくクルアーンの教えに従うことによってなされなければならない、との主張が形成される。

3-3 ウマットの興亡史

次いで著者は、上記の②と③の主張をさらに展開するべく、引き続きタンターウィーに依拠しながら、イスラームの歴史的展開に話題を移していく。第10～14回の5回にわたって、「ウマットの発展と衰退」と題し、アラブ民族を中心にイスラームのウマットの興亡の歴史が語られる。

第10回[Qalam19(1952.2):6-8]ではまず、「イブラー

ヒーム」章第5節「……アッラー（が過ぎ去った昔の諸民族に起し給うた）数々の出来事を憶い起させてやるがよい。あれはたしかに、辛抱よくて感謝の心を忘れない人間には立派な神兆であるはず」[井筒1958b:56]を引き、過去の歴史を学ぶことの重要性を述べる。同章で語られる預言者ムーサーとイブラーヒームの事蹟を参照しつつ、「（ムーサーが）預言者ムハンマドよりもかなり以前に、彼の民を闇から救い出し光へと向かわせるべく遣わされた」こと、「ムハンマドもムーサーの範にならい、同様のやり方で人々にアッラーの命令を伝えた」こと、そして預言者らのメッセージを無視した異教徒たちのウマットがいずれも災厄に見舞われたこと、などが述べられ、過去の出来事に指針を求めることの重要性が説かれている。

第11回[Qalam21(1952.4):7-9:32]では、タンターウィーによるアラブ民族の発展史が具体的に紹介されるが、バスメーはその前に以下のように述べる。「……イスラームのウマットの発展と衰退の歴史は、一般にはすなわちアラブ民族の歴史である。彼らこそイスラーム文明の建設者であり、その発展の礎を築いた人々である。……しかしクルアーンの教えはイスラームのウマット全体に対する導きであり、それはムラユ民族にも当てはまる。……ムラユ民族の歴史を探求し、広めよ。……イスラームを受容して以来、ムラユ民族が東南アジアにおいていかに高度な文明を築いてきたか、それが今や征服され、衰退してしまった理由は何か、そして独立と主権を取り戻すための方法はどのようなものか、を明らかにせよ……」。このように、バスメーはムラユ民族の歴史を学ぶことについては将来的な課題として位置づけた上で、その模範たるべきアラブ民族の歴史の叙述に筆を進める。

ここでは、これまでの連載で述べられてきたことと重複する内容も多く、あまり目新しいところはない。イスラーム以前には分裂抗争していたアラブ民族が、イスラーム受容後はひとつのウマットとして結束し、急速に力を増し周辺地域へ支配を広げていったことが述べられる。特に学問の発展に焦点があてられ、なかでもアッバース朝における学問の発展について詳細に述べられている。クルアーン解釈などイスラーム諸学だけでなく、アリストテレス、ソクラテス、ユークリッド、プトレマイオスなど古代ギリシアの諸学も学ばれたこと、それら諸学は同時代のヨーロッパよりも進んでいたこと、などが述べられる。

第12回[Qalam23(1952.6):45;38-39]では、アラブ民族のその後の没落について論じられる。その原因はアラブ民族がクルアーンの教えから逸脱してしまったからである、とするタンターウィーの主張は、ここまでの記事の内容から容易に理解できよう。さらにタンターウィーは、ここでも学問に注目し、諸学問の衰退が中でも最も主要な原因であったと考える。「……(現在の)ウラマーたちは、礼拝について、喜捨について、売買や財産(に関する法)についてなどはたくさんの著作を書いているのに、何故、自然の秘密を探求すること、天文学、動物学、植物学、地質学などについては書かないのか。……これらは今まで軽視されてきたが、それこそが我々の没落の理由である。我々の祖先がかつてこれらの諸学問を探求し、その発展を極めたことを思い起こすべきである……」。

これを受けて、残りの2回では学問・科学の問題に再度焦点があてられ、さらに詳しく叙述される。第13回[Qalam25(1952.8):6-10]では、「いかにしてイスラームの諸学問がヨーロッパへ移転されたのか？」というテーマが論じられる。12世紀までのイスラーム諸学の成果がモンゴルの征服活動やイベリア半島のレコンキスタを通じてヨーロッパにもたらされたことなどが説明された後、西洋の諸学問に影響を与えたイスラームの学者たちが数多く紹介される。例えば、9～10世紀に活躍し、12世紀に翻訳を通じてヨーロッパにも広く名を知られた天文学者バッテリー(Abu Abd Allah al-Battani)について、「……西洋人にはアルバテグニウス(Albategnius)の名で知られた。880もの星を収録した一覧表を作成したり、“太陽系”についての研究でも知られる……」などと述べられる。また、ラテン名ラーゼス(Rhazes)として知られた医者・哲学者ラーズィー(Abu Bakr Muhammad ibn Zakariya al-Razi)[大塚他編2002:1038]について、「……医学の分野で貴重な成果を残し、化学の分野では、フランスの化学者ラヴォワジエ(1743-1794)に先駆けて元素についての研究を行った……」と説明するなど、ヨーロッパの諸学問の先駆けとなった事例を強調する。その他にも、西洋ではアヴェロエスの名で知られ、アリストテレスの注解書を執筆したことで西洋哲学に大きな影響を与えたイブン・ルシュド(Abu al-Walid Muhammad ibn Rushd)の例や、解剖学や眼科医学、動物学や化学など様々な学問分野における同様な事例が紹介される。

次いで第14回[Qalam26(1952.9):36-39]では、イス

ラームを引き継いだ西洋近代文明によって諸科学がどのように発展したかが紹介される。先述のバッテリーに強い影響を受けたと言われる16世紀の天文学者ティコ・ブラーエ(Tycho Brahe)にはじまり、ガリレオ・ガリレイ、ニュートン、デイドロ、ラヴォワジエ、ジェンナー、シュリーマン、エジソンなど、様々な学問分野で活躍した人物が次々に取り上げられ、その功績が列挙される。その1つ1つについてイスラームの諸学問との関連が述べられるわけではないが、例えばニュートンについて「……ヨーロッパ人たちは、彼が初めて“引力”を発見したと思っているが、実際にはこの知識は彼より600年も前にムスリムによって発見されていた。とは言え、このイギリス人科学者は他にも多くの発見をしており、その偉大さには変わりはない……」と述べるなど、イスラームの先進性を主張する箇所も見られる。末尾で著者は「……現代では、科学はますます進歩している。例えばペニシリンや原子爆弾のように、人類にとって有益なものや危険なものが数多く生まれている……」と述べて、科学の進歩に対する読者の注意を喚起している。

4. 暫定的結論

以上が、筆者が現在までのところ読解を終えた部分の内容である。なお、これ以降の連載後半では、飲酒や賭博の禁忌、夫婦の絆、などの個別具体的なトピック記事や、「信仰ある人々は常に試練を受け続ける」などといった啓蒙的な記事が主体となる。これについては今後の課題とし、さしあたり前半部分の内容だけからこの連載記事の資料的意義について若干の考察を試みる。

記事の基本的な主張は、イスラーム——より正確にはクルアーンに示された思想・価値観——が西洋近代文明に匹敵する高度なものであり、かつそれと調和するものである、従ってムスリムはこれをあらゆる面において指針とするべきである、ということであろう。その主張において、過去の歴史に関する認識は重要な位置を占めている。即ち、「かつてはイスラームの文明は偉大であり、その学問は多くの優れた成果を生み出した。しかしやがて墮落してしまい、その文明の遺産は西洋が継承し発展させた。即ち、現在の西洋近代文明もその土台はイスラーム文明に基づいている。かつて西洋がイスラームを継承して発展を遂げたように、今度はイスラーム世界が逸脱と

停滞から抜け出し、西洋近代文明を取り入れることで発展への道を進むべきだ”という論理である。この歴史認識は、タンターウィーの近代主義イスラーム改革思想において大きな位置を占めている。即ち、彼にとって、近代文明の導入は西洋への屈服や迎合ではなく、イスラームの過去の栄光を回復することには他ならないのである。バスメーもこの認識を共有し、タンターウィーが描くアラブ民族を中心としたイスラーム文明の盛衰の歴史を詳細に紹介している。

ところで、東南アジアにおける近代主義的イスラーム改革運動について、従来の研究における一般的な理解はどのようなものであろうか。インドネシアにおけるムハマディヤ(Muhammadiyah)などに代表される近代派の改革運動の特徴としては、①イスラーム法解釈の硬直化・伝統の墨守(タクリド)を批判し、社会の現状に適合した新たなイスラーム法解釈(イジュティハド)の推進を主張したこと、②現地社会の非イスラーム的な慣行やスーフイズムにおける聖者崇拜などを批判し、信仰の純化、原初のイスラームへの回帰を訴えたこと、③黑板や机の使用、学年制の導入、女子教育の拡大など、近代的制度に基づくイスラーム教育の普及に努めたこと、の3つが挙げられよう[Noer 1973]。いずれも、基本的にはタンターウィーやラシード・リダーなど中東のイスラーム復興・改革主義者と共通する目的・方向性である。他方、この連載記事において見られるような過去の歴史に対する認識の重視は、東南アジアの近代主義イスラーム改革主義においては、さほど目立たないように思われる。

素朴に考えれば、中東のアラブを中心とするかつてのイスラーム文明の繁栄を、いかに同じイスラームのウマットとは言え、東南アジアの一般ムスリムが“我々の”過去の栄光として認識することは難しかったのではないかと想像できる。この連載記事において、過去の歴史に具体的に言及する際のタンターウィーの叙述にはアラブ民族主義的な傾向も見られ、この点も東南アジアのムスリムにとっては受け入れにくい要素であったかもしれない。にもかかわらず、バスメーがこのようなタンターウィーの主張をほぼそのままのかたちで紹介しているのは何故か。それは恐らく、先述したように、この歴史認識がタンターウィーの主張の論理構成において不可欠であり、これを排除してしまえば彼の近代主義的改革思想が説得力を失う、と考えたからではないか。だとすれば、

この点において、この連載記事が東南アジアにおける近代主義イスラーム改革運動の展開について新しい視点を提供してくれる可能性がある、と言える。

最初にも述べたように、記事の読解はまだ途中であるし、著者バスメーの詳しい経歴も不明という状況では、これ以上の推論を行うのは困難である。ここまでを暫定的な結論とし、これ以上の推論は更なる資料の読解を踏まえて行うこととしたい。

資料・参考文献

- Qalam no.10-26 (1951.5.-1952.9), Singapore: Qalam Press.
- Abudullah, Taufik, 1971, *Schools and Politics: the Kaum Muda Movement in West Sumatra (1927-1933)*, Ithaca: Cornell University.
- 井筒俊彦訳、1958a、『コーラン(上)』、岩波文庫。
- 井筒俊彦訳、1958b、『コーラン(中)』、岩波文庫。
- 井筒俊彦訳、1958c、『コーラン(下)』、岩波文庫。
- Laffan, Michael Francis, 2003, *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*, London/New York: Routledge Curzon.
- Noer, Deliar, 1973, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*, London: Oxford University Press.
- 大塚和夫他編、2002、『岩波イスラーム事典』、東京：岩波書店。
- 山本博之、2003、「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立と初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要) 7、pp. 59-73.